

インド学の歴史・現状・未来

江島 恵教

近代的なインド学は他の古典領域の研究と同様に、Willam Jones(1746-94)、H.T. Colebrooke(1765-1837)等のヨーロッパの学者によって開始され、それが南条文雄(1847-1927)、高楠順次郎(1866-1945)等によってわが国に移入紹介され、それ以来日本では仏教学研究との関係もあって、急速な進歩を遂げてきた。

研究の対象となる「インド」という概念も、古来インドにおいては“*Arya-deZa, BhArata-varSa*”，中国では“身毒，賢豆，天竺，天竺，印度”，ヨーロッパ世界では“*India<Indus, Sindhu*”，“*Hindu<Hendh, Hindhu*”等と称され、現代に至っている。

インド文化は“*Veda, UpaniSad, DharmaZastra, MahAbhArata, darZana, Brahmanism, Buddhism, Jainism, Hinduism*”等、多様な歴史的展開を経、いわゆるアーリヤ文化、ドラヴィダ文化、イスラム文化、ヒンドゥ文化などが重層的に織り交ざり、「多様なインド」と呼ばれるような状況を呈している。他方インドにおいては、つねに文化的伝統への固執と維持への努力がなされ、かつしばしば伝統の見なおしも行われているが、その中において個人のoriginalityをどの程度認めるかが問題とされる。また、仏教・ヒンドゥ教を中心としたインド文化がインド以外の、主に中央・東アジア・東南アジアに伝播され、それぞれの地域において、独自の展開を見せていることも、看過されてはならない。

したがって、インド文化を形成し、それを維持する根幹となった「古典」の研究は、インド内部における「原典」研究それ自体が「伝承と受容」の過程と密接に関係し、他地域との関連も考慮されながら、総合的に推進されなくてはならないのである。

現在「インド学」は、古代・中世インドの研究と近現代インドの研究が主流となり、その二者の間に乖離が認められる。しかも、「インド」を一つの統一された地域と見なして研究される場合が多く、現在は、例えば、南インドと西北インドといったように「インド」自体の内部をさらに分解して、研究する必要性が叫ばれつつある。この点は「古典」的テキストの研究の場合も、今後十分に留意されるべきである。

分解と総合、ミクロとマクロの視点を、つねに拮抗させながら、古典が研究されねばならないのである。

このことは、他領域の古典研究についても、同様に当てはまるであろう。

西洋古典学の歴史・現状・未来

内山 勝利

この領域における実質的な基礎作業は、すでに前3世紀のアレクサンドリアで、文法学・文献学として始められている。その伝統は、同地をはじめ、アテネ、ローマなどを中心として継承され、さらに古代世界終焉ののちは、ビュザンティオン（コンスタンティノポリス）に拠点を移して、ルネサンス期以降西欧に流入するまで、ほぼ途絶えることなく営まれてきた。

むろん、この間に逸失した古典著作は多く、また伝承にはキリスト教との軋轢や偶然の事情からさまざまなバイアスがかけられ、必ずしもすぐれた著作のみが選別されて今日に伝えられているとは限らないのが実情である。現存する古典著作は、おそらく90%以上がキリスト教修道院で羊皮紙に筆写された「中世写本」を経由しており、修道僧たちのニーズと選択が伝承を決めていると言ってよからう。とはいえ、比較的には確固とした伝統に支えられてきただけに、文献学的にはかなり質の高いテキストが、(しかもある意味では適度な量だけ)われわれの手にもたらされていることは、幸いとするに足りよう。

たとえばプラトンについてみれば、今日その「中世写本」なるものは、著作の一部のみを含むものまで数えれば、500は優に越えており、あるいは1000に達する見込みさえあるかと言われている。しかも、どの写本も比較的大過ないレベルで安定しており、おそらく、今後すべての写本が校合されたとしても、革命的なテキスト変更はまず起こりえないであろう。もっとも、見方を変えれば、今日のプラトン・テキストの質は、9世紀末に筆写されたA写本・B写本（これらは多分当初はセットになって一つの「プラトン全集」を構成していたものと考えられている）にもっぱら支えられているところが大きく、もしこれら二つの写本がかりうじて伝わるのがなかったとしたら、テキストは一挙に不安定なものになっていたかもしれない、とも思われる。事実、B写本の発見などは、ほとんど数奇な偶然が働いた結果に他ならな